

最新医療紹介

# 末期がん患者に生じた皮膚潰瘍に対する Palliative Surgery (緩和手術) の挑戦



形成外科部長 藤岡 正樹

## 1. Palliative Surgery (緩和手術) とは

末期癌の疼痛や、吐き気などの苦痛は緩和医療の支援が一般的になり、患者は余生を家庭で安楽に暮らせるようになってきました。形成外科ではあらゆる創を閉鎖し治癒させることができます。しかし進行癌に伴う潰瘍に対しては、患者の余命が長くないために積極的な治療が行われていませんでした。ところが進行癌の皮膚転移による潰瘍が生じた場合、キズがら出る大量の浸出液、出血、悪臭のため家庭での創管理ができません。そのため患者は短い余命にもかかわらず入院生活を余儀なくされます。Palliative Surgery (緩和手術) とは患者の苦痛を伴う症状を軽減させることを目的とした手術です。

## 2. 長崎医療センター形成外科での Palliative Surgery の実績

長崎医療センター形成外科では、2010年からの4年間で12例の緩和手術を行ってきました。いずれも末期癌患者で浸出液、出血、悪臭、創痛に苦しんでいましたが、手術でこれらの苦痛を取り去ることができ、家庭で余生を送ることができるようになりました。術後の無症状期間は平均9.5カ月、術後平均寿命は14.4カ月で、症状が患者に及ぼす影響を検討したところ有意差をもって改善が認められました。Palliative Surgeryでは2週間程度の入院手術と引き換えに、1年以上の家庭での家族と一緒にいる生活と、苦痛からの解放を提供することができます。

写真は肺がんの顔面皮膚への転移症例です。疼痛と出血に加えて顔貌の変形は患者には耐えられない苦痛となり、全く人と会えなくなり、うつ症状をきたしました。手術を受けて1週間で自宅に帰った後は毎日散歩に出るほどに精神状態も改善しました。1年後に肺癌増悪のために家族に囲まれて亡くなりました。



## 3. Palliative Surgery を受ける条件

Palliative Surgeryは根本的癌治療ではないため、これを行うには以下の条件を満たす必要があります。

1. 手術で皮膚症状の改善が確実に見込める
2. 患者が根本的な治癒を目指した治療でないことを理解したうえで手術を望む
3. 簡便な手術が可能である

(M.Fujioka, A.Yakabe ; Palliative Surgery for Advanced Fungating Skin Cancers. WOUNDS, 2010 )

## 4. 長崎から世界へ

私たちのこの試みはすでに国際学会でも評価を受けて海外でも招待講演をしていますし、英文論文としても発表しています。



フィリピン創傷ケア学会の招待講演  
「Palliative surgery は末期癌患者のQOLを改善する」

この報告を読んだ米国の医師から以下のような手紙がきました。

「Dr. Fujioka, Palliative surgeryは大いに論議されるべき大切な問題です。私は緩和創傷ケアに関する教育プログラムを作っています。是非あなたの資料を使わせてください。これらの苦しみを得ている患者は沈黙の中で、当然受けるべき福音を得ることなくむなしく最後の日々を送っています。Jennifer Hurlow Memphis TN」

彼女の申し出に賛同して、症例写真の提供をしました。アメリカでは既に以下の絵のように若い医師や学生、看護師たちに palliative surgeryの啓発と教育がなされています。

## Treatment Options



23cm x 21 cm tumor with copious exudate, bleeding, malodor, pain.



3 weeks post op. almost completely resurfaced. No odor, no infection, no necrotic tissue, and minimal drainage.

Died at home of lung metastasis 8 months after surgery.

Hurlow先生の教育スライド  
(症例写真はいずれも患者の同意を得て使用しています)

